



◎下北半島の産業・経済の振興・発展と共に、地元出身の技術者の育成を目的として創立。校訓「自立」の下、「新しい時代を主体的に切り拓く若人」を育むことを目指す。文武両道を志し、部活動にも盛んに取り組む。

設立

1964(昭和39)年

形態

全日制/機械科・電子機械科・電気科・電子科・設備・エネルギー科/共学

生徒数

1学年約175人

2015年度進路実績(現浪計)

国公立大は、弘前大、山形大、長岡科学技術大、青森公立大などに6人が合格。私立大は、青森大、八戸工業大、日本工業大、東海大などに延べ9人が合格。専門学校進学13人。就職は、東北電力、トヨタ自動車、東日本旅客鉄道、本田技研工業などに121人。公務員11人。

住所

〒035-0082
青森県むつ市文京町22-7

電話

0175-24-2164

Web Site

<http://www.mutsu-th.asn.ed.jp/>

青森県立
むつ工業高校

進学実績向上

生徒指導と学び直して 「荒れ」の状態を克服し 国公立大合格者を出す

変革のステップ

背景

◎生徒の問題行動からは、学校・教師への釈然としない思いが垣間見えた。不本意入学者や意欲の低い生徒もいた

STEP 1

実践

◎生徒との信頼関係の構築に向け、生徒の思いに寄り添い、将来への目標を持たせる指導を重視。生徒が落ち着いた段階で、学び直しを実施

STEP 2

成果

◎基礎学力や学習意欲が向上し、国公立大合格者を出す。以降、進学志望の生徒が増加し、毎年国公立大合格者が出るように

STEP 3

生徒の思いに寄り添い
教師と生徒の信頼関係を構築

約10年間の変革を経て、毎年国公立大の合格者が出るようになった青森県立むつ工業高校。しかし、かつては、生徒の問題行動が多く、授業に集中できない生徒もいた。設備・エネルギー科主任の畑中次夫先生はこう語る。

「教師の言葉を聞こうとしない生徒の姿からは、高校以前の経験からくる、学校に対する釈然としない思いが見え隠れしていました」

2006年4月、赴任2年目の畑中先生は、設備システム科(現、設備・エネルギー科)の学科主任兼3年生担任となり、校内に落ち着きを取り戻すべく変革に着手した。まずは、生徒の心の内を知るために、生徒たちに「学校や学科に不平・不満があればどんなことでも私たちに言ってほしい」と何度も語り掛けた。すると、1人の生徒が「進路のことを相談できない」とつぶやいた。もちろん、同校ではそれまでも進路指導を行ってきた。しかし、生徒と教師との間に信頼関係が十分に出来ておらず、相談する気にならないという思いが隠されていた。そこで、教師たちは、生徒の不平・不満に耳を傾け、改善できることは改善し、出来ないことはきちんと理由を説明して、生徒との関係構築に努め始めた。

目標に向かって努力した生徒が 晴れやかな表情で卒業

いわゆる不本意入学者がいたことも、学校の求心力を低めている要因だった。

「過去に勉強などで挫折した経験から、自己否定をする生徒が目立ちました。しかし、そうした生徒も、心の中では『このままではいけない』という焦燥感を抱いています。そこで、生徒に『君たちはこのまま一生さばるつもりなのか。どこかで変わらなければいけない』



青森県立むつ工業高校
木村浩行 きむら・ひろゆき

教職歴25年。同校に赴任して2年目。教務主任。「生徒に学ぶ楽しさを知ってもらい、可能性を伸ばす」



青森県立むつ工業高校
田村博文 たむら・ひろふみ

教職歴18年。同校に赴任して5年目。電子機械科主任。「個々の生徒の性格、能力に沿った社会人の育成に努める」



青森県立むつ工業高校
畑中次夫 はたなか・つぐお

教職歴33年。同校に赴任して11年目。設備・エネルギー科主任。「生徒を成長させ、成長する姿を見て喜びを感じる教師でありたい」



青森県立むつ工業高校
渡辺 充 わたなべ・みつる

教職歴10年。同校に赴任して6年目。基礎学力向上委員会委員長。「教育に信念と謙虚さを持ち、生徒と共に成長できる教師でありたい」

ない。それなら今変わろう。高校で頑張ろう」

と、繰り返し呼び掛けました」（畑中先生）

生徒が進むべき方向性を具体化できるように、進路や将来についても語り掛けた。例えば、高校卒業後は、仕事をして生計を立てなくてはならないこと、なりたい自分になるためには努力が必要なこと、憧れの企業に就職した先輩が頑張っていた様子などを、毎日、帰りのホームルームで話す。更に、自分の将来についての作文を書かせ、正面から自己に向き合わせた。それには、自分の将来に目を向かせ、前向きな気持ちで芽生えさせる狙いがあった。

また、1時間目から落ち着いて授業に取り組めるよう、始業前に百ます計算を実施。少しでも解けるタイムを早くすることに喜びを感じ、本気で取り組む生徒が増えるにつれて、学習に前向きになれなかった生徒も、真面目に取り組むようになった。

大きな手応えを感じたのは、3年生5月のクラス対抗漢字コンクールだった。1年生の頃から常に最下位だったクラスが、突然、校内1位に輝いたのだ。以前から学級の半分は生徒は真面目に取り組んでいたが、他の半分の生徒が足を引っ張っている状態だった。しかし、生徒に漢字の大切さや学習の意味を十分に話した上で、コンクールに向けた学習をさせたことで、消極的だった生徒がやる気になり、目標を持って頑張るようになった。

そのような指導を通して、生徒がそれぞれの進路を目指して奮闘する姿が見られるようになった。卒業式には、多くの生徒が晴れやかな表情をしていたという。志望通りの進路に進む生徒も、そうでなかった生徒も、力を尽くして頑張ったという実感があったからだ。

その後も、生徒との信頼関係を土台とする丁寧な指導を徹底し、生徒の「荒れ」の状態は急速に収まっていった。入学時に服装や授業態度などは厳しく指導しているが、上級生が良いモデルとなっているため、以前と比べて教師の負担は軽減している。

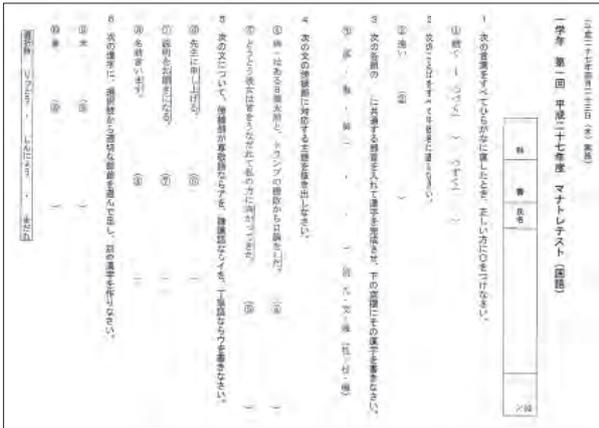
全学科に学び直しを導入し 課題だった基礎学力不足を克服

生徒の学びに向かう姿勢が整ってきたことから、10年度には基礎学力の定着と強化に向け、学び直しに着手。国教英の担当教師で「基礎学力向上委員会」を組織し、全学年で朝学習の時間に、ベネッセの「マナトレ」（*1）を始めた。同委員長の渡辺充先生は次のように説明する。

「生徒の多くは、中学校までの学習内容が定着しておらず、授業でつまづく生徒や、採用試験の面接は合格点でも、筆記試験で合格点に届かないという生徒もいました。基礎学力の定着は本校の大きな課題でした」

朝学習の時間に1日1ページ、決められた教

*1 ベネッセの教材の1つ。学習力を身に付ける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。



「マナトレコンクール」はクラス対抗のため、競争心を持って取り組む生徒が多く、平均点は高い水準で推移している。*学校資料をそのまま掲載

科に取り組ませ、やりっ放しにならないよう、学年単位で単元ごとのオリジナルのテストを作成し、年12回のクラス対抗「マナトレコンクール」を実施している(図)。このテストで合格点に達しなかった生徒は、放課後に補習を受ける。学び直しが定着するにつれて学力は着実に高まり、生徒の学びへの意識も変化している。

ベネッセの「基礎力診断テスト」(*2)も、生徒の学力や意識の向上に活用。学級ごとに分析し、課題の洗い出しと対策、生徒個々のデータを踏まえた個別指導や補習を行う。同校で行う模試は基礎力診断テストのみで、GTZ(*3)は生徒が自身の実力を客観的に把握する貴重な材料となる。また、定期考査は科によって

**誰もが無理だと感じていた
国公立大合格への挑戦**

同校の変革が更に進展した契機は、ほとんど実績のなかった国公立大合格への挑戦だった。

内容が異なるため、基礎力診断テストの結果を各科の学力の推移を比較する指標としている。就職志望者にも、基礎力診断テストの結果に基づいた指導を重視している。以前は、伝統校の強みもあり、就職面での苦勞はなかったが、近年は不況などの影響から苦戦するケースが増え、生徒の学力向上が不可欠となった。そこで、卒業生の就職先と高校時代の評定平均やGTZをリスト化。それを生徒に見せながら、「頑張れば希望する企業に入れるかもしれない」と声掛けていく。具体的な数値を示すことで、生徒が目標を立てやすくなったという。

「普段から授業内容などについての質問を受けることが増えました。学び直しを行うことで、自分のつまずきに気づき、克服しようという意識が高まったのだと思います。マナトレコンクールでは、全員が満点を取るクラスまで出るようになり、学校全体で競い合うようになり組んでいます。更に、就職の筆記試験の結果が原因で不採用になる生徒も減り、基礎学力の定着につながっていると実感しています」(渡辺先生)

同校では、慣例的に成績上位者は一部上場企業に就職しており、進学指導には相対的に注力していなかった。そこで、10年度には、当時の石田一成校長が、生徒の可能性を最大限に伸ばすことを目指し、「国公立大合格」を目標に掲げた。教師の誰もが「無理だ」と感じていた中で、石田校長が自ら先頭に立ち、大学進学の意義や国公立大の魅力を生徒に伝えていった。そして、学力が高く、進学意欲もあった3人が受験を決意した。教師が一丸となって指導した結果、3人も推薦入試により、国公立大に合格した。続く11年度も、2人が国公立大に合格。そうした実績が積み重なるにつれ、教師の意識は「無理に決まっている」から「挑戦すれば出来る」へと変化していった。教務主任の木村浩行先生はこう語る。

「教師は生徒に対して先入観を持って指導していたと反省しました。生徒自身も高校入学以前の成功体験の乏しさから、自分が大学に合格できるとは思っていませんでした。しかし、低学年次から目標を持たせ、3年間しっかり指導していくことで、生徒の可能性を大きく広げられると考えるようになりました」

入学時に国公立大を目指す生徒はほとんどいなかったため、教師が生徒に大学進学の意義を説いていたが、ほぼ毎年合格者が出るようになって、次第に生徒から国公立大への進学志望を口にするようになった。それに伴い、校内の指導体制

*2 GTZ(学習到達ゾーン)という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性(自我同一性)を測る。ベネッセの生活・学習指導用テスト。
*3 ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」までの15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

の強化に努めており、現在は進学志望者に対して、各教科の教師が分担して小論文や面接、プレゼンテーション、志望動機作成などの指導を行っている。

電子機械科のある生徒は、部活動でロボット製作に没頭し、「青森県高等学校ロボット競技大会」で優勝した。全国大会では上位に進めなかったが、その悔しさから「大学でロボットについて学びたい」という思いが強まり、当初の就職志望から大学志望に変更。本人の熱意と教師の指導が実り、弘前大に合格した。電子機械科主任の田村博文先生は次のように語る。

「学力的には国公立大合格は厳しい状況でしたが、教師たちが全力で生徒をサポートし、励まし続けました。面接では自作のロボットを持参してアピールするなど、必死に熱意を伝えたことが良い結果をもたらしたと思います」

15年度入試では10人が国公立大を受験し、過去最高の6人が合格した。そうした成績上位層の進学意欲の高まりから刺激を受け、中・下位層の生徒もそれぞれの目標に向けて努力する姿が見られるようになっていく。

「目標とする資格を取得しても満足せずに、更に上位の資格を目指す生徒が見られるようになりました。学級内で教え合う姿もよく見られ、みんなで学びに向かう雰囲気が出てきています」(木村先生)

かつてのイメージを拭い去り 地域から信頼される高校へ

生徒の姿や校内の雰囲気が大きく変わったことで、地域住民からの評価も一変した。

以前は、地域から荒れている高校と思われることが、今では生徒の礼儀正しさや進学実績、就職率の高さなどが評価され、『生徒をしっかりと育てている学校』と評価されるようになった。同校の入学者は、周囲から『良い高校に入ったね』と言われることが多くなるなど、地域から信頼される高校となった。

また、生徒が母校の中学校を訪問し、中学校の教師から高校への要望を書いてもらっている

が、そこには「生徒がしっかりと育っていてあげたい」「以前のイメージとは違って驚いた」といった、同校の教育活動を高く評価する声が多く寄せられている。

「10年間を振り返ると、本当に良い学校に変化したと思います。しかし、ゴールにたどり着いたわけではなく、地道な努力が実って上昇気流に乗り始め、ようやく進学指導の入り口に立ったという認識です。今後は、指導を組織的に進められるよう体制を整えることが課題です。主体的に学ぶ生徒の育成に努め、進学・就職の両面で、より多くの生徒の志望を実現できるよう、高みを目指していきたいと思えます」(畑中先生)

情熱 若手教師が語る、指導変革への

教師が熱意を持てば 生徒は必ず応えてくれる

基礎学力向上委員会委員長 渡辺 充

基礎学力が定着していないと、進学でも就職でも志望を実現することが難しくなります。基礎学力向上委員会の委員長として、「マナトレ」や「基礎力診断テスト」などを活用し、いかに生徒の基礎学力を高めるかを考え続けてきました。結果として、生徒の学力や学習意欲が徐々に向上し、毎年のように国公立大合格者が出る高校になったことに大きな喜びを感じています。

本校の生徒にとって進学や就職、また資格取得は大きな目標ではありますが、それが最終的な到達点ではありません。本校では、工業高校として、一流の技術者を育てるための指導を大切にしていきたいと思っています。優れた技術者となるためには、自分の専門とは異なる分野への興味や幅広い視野を持ったり、努力を続けたりすることが素養として欠かせません。そこで、担当教科の数学の授業でも、生徒に自分が目指す目標とは一見関係がないように思えても、しっかり学ぶことが技術者としての成長につながるということを、何度も繰り返し話しています。

これまでの実践を通し、教師の熱意には生徒は必ず応えてくれることを実感しました。「渡辺先生がいるから頑張れる」と、最後まで諦めずに学習した生徒もいます。これからも生徒とのコミュニケーションを大切にし、生徒が自ら育っていく姿を感じていきたいと思っています。